

武家名目抄稿

軍陣部六三十二

和書門	二五二〇六	架	函	號	類
	一〇七	冊	架	函	號
	四九六	冊	架	函	號

和書	二五二〇六	架	函	號	類
	一〇七	冊	架	函	號
	四九六	冊	架	函	號

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457(430)
函號	153 275



武家名目抄稿第十二冊

軍陳部六之二目錄

夜軍合源

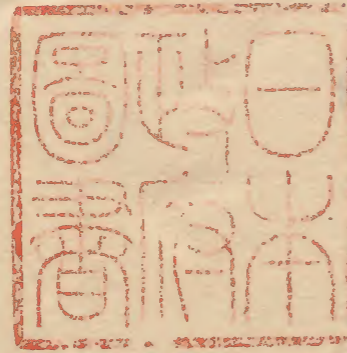
夜戰

夜合戰

夜力

霄込

朝合戰



朝カケ

朝込

ツノ軍

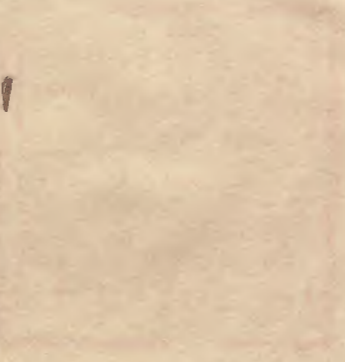
位詰

待軍

本ノ合戦

セリ合 治六ノ一日

小セリ合 治六ノ一日



セリ合々戦

取合

坪軍

地取合

楯突軍

平場合戦

平場 菟合

野相合戦

野合戦

懸合々戦

釣合ノ合戦

打籠ノ軍

マハラカケノ軍

中角ノ合戦

主戦

手遣

手働

手合 手ツカヒ

手合ノ合戦

手組軍

矢攻軍

手定ノ合戦

手攻勝負 手結勝負

足輕場

足輕軍

足輕合戦

足輕迫合

言葉戦

最後合戦

吊合戦

悔之合戦

合戦

武家名目抄稿第十二冊

軍陳部六之二

夜軍

四七三

平家物語云

三井寺  
其上条

平家物語云  
平家物語云  
平家物語云

望副將軍は薩摩守大藏頭公只勢一馬

多騎圍城を發向を奪へし  
大元一人甲

の跡を志免かつて  
木立く結

りけり  
知封り  
合  
一  
日  
戦

音と取らぬものも流の代法師よき入る  
たきぬ者ありくくたさいくすし軍事

入る方をはあつと

會得し家合考云はは申再木造力有不

及翌日より使を立頻りし和和氣出以世

より置此軍と沙治せしはこそ也

小島宗憲家傳云中中たるは右之面は信長又

少し馬矢のすへ存んる高田三若事あるも

後益君リ悠々其田益物を添五人和和

押忍は有軍に不仕と也

甲陽軍記云其州玉纒の地を益も小島左馬

末よりあさるし被被左馬門者末武道あり小嶋

の縁日徳藏する故り地切の巻込度和和ありし

あり既に抄物ハ其縁を此甲乃ハ陽ノ其ナ陸

ところ起之氏氏康云其先をいつらすは康川越本

軍のいし物をいし系しつたま河越の地和和

有るは、(紅) 宿願のハ乃、探り人あを引立城  
を處 こゝ までとる、故に、康の利運うなる

東近基業云、柳原助、大棟十、さ、其日は

就術あつた也、味方、長途、乃、事、を、窺ひ、夜、討

と、人、も、斗、ふ、こゝ、志、の、よ、は、詭、計、を、取、(時) 甲、を、法、り

海、舟、を、禁、張、る、を、す、之、き、り、一、く、悔、し、(小)

亦、信、付、入、ま、か、と、中、之、れ、は、名、徳、に、康、政、う、(言)

を、は、許、容、者、之、は、名、即、法、軍、一、若、成、り、せ

らる

叔井日記云 久下、輝、云、 今、也、之、事、之、由、也、よ

王、將、軍、信、長、と、池、の、上、乃、陣、而、く、軍、の、第、一

敵、軍、の、布、隊、を、以、て、一、戦、の、内、を、あ、つ、(此、の、邊)

は、色、(紅) 之、事、也、(此) 乙、未、武、略、の、事、を、お、(此)

夜戦

諷信宗記云 輝、亮、云、(輝) 直、江、十、り、は、(此、下)

知、力、可、成、其、上、今、の、代、の、城、に、(東、戦、牙、了)

修

夜合戦

安土日記云丹羽左衛門右衛門守景の討死  
 の所遺物を尋ねて神戶伯耆守初めとて  
 究竟の信亦余一人兼合戦之討死  
 甲陽軍記末書云山本勘助女中たる中  
 小幡左衛門守朝成を以て引かゝる敵は山本  
 多未尉云し

又云阿部加賀守中上は我子同様の大川  
 ハを以て敵の人数を見せこきカレコニ  
 陣を破り夕日に浴へ道化となく兼合戦  
 小〜切永中益きと皆一と在りし  
 長閑水句神あり義と中林頼長  
 端をよむと思召余人の中事元と路を以  
 三好記云同十一月廿二日打立之好方の  
 四地城攻事は之宛おぼる京下河原



東の東の晴元へ 陽高の晴方由す之本陣一  
本陣へ 西の陣を是れくし 河内へ引退  
人云々

夜ナヤ

大友與藤原 日 諸軍根代場へ 招陣たり  
一と 宮初 善祥の 本陣 薩州 勢 あり  
ひ 軍 あり 一と 戦 あり 事 あり

甲五 甲陽軍記 あり 多田 三八は 善祥の 本也

東の東を 能す

十六廿六ウ 関八州古戦録云 上乃勢 薄生 飛陣 あり

ひの 後先 一 砲 あり 世 休 あり 在 同  
ひの 世 あり あり 砲 あり 急 増 あり あり あり あり あり

汝 退 兵 二 三 百 あり 引 連 あり あり あり あり あり

さ 水 希 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり  
さし あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

さ あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

一とは是一と云ふは

賈逵

武<sup>四</sup>隆業<sup>陰</sup>云云日向原の御誕生は日向討死

と極之出陣也日向の<sup>攻</sup>攻は日向討死

岩概少城主多田十郎は日向討死日向討死

日向討死日向討死日向討死日向討死

日向討死日向討死日向討死日向討死

日向討死日向討死日向討死日向討死

日向討死日向討死日向討死日向討死

朝合戦

毛利家記云文禄二年四月廿五日和事迄

右邊より多勢を引具南大門をお大子七門

町斗出し早唐人の先子より掛り市連は畷

五人と和合之大花を散り之戦ひ

日向討死日向討死日向討死日向討死

日向討死日向討死日向討死日向討死

部多集 桑原 中郎多集 其時黨急 孫有 史河  
祖其 階系 多 祖 男 原 桂 幸 田 大 陣 其  
次 久 為 未 信 怪 其 以 利 七 部 多 集 元 康 不  
り 躬 合 戰 乃 場 在 少 一 誠 之 コウヨウ 原と云  
而 右 乃 方 廿 山 乃 下 不 階 系 右 勢 在 備 入  
之 如 其 一 ます

朝 廿 日

高 玉 記 云 同 九月 廿 一 日 神 呪 寺 乃 富 松 地

一 物 乃 乃 一 之 書 寫 乃 一 乃 一 首 在 矣 了 了  
乃 合 乃 甲 乃 物 始 乃 乃 乃 悅 乃 希 事 乃 乃 乃 乃

朝 込

<sup>四</sup> 武 薩 叢 語 云 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
義 鉦 と 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
陣 乃 居 希 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃  
上 乃

し狂ひ

ツノ軍

長門本平家物語云 光帝二位 入海 一ツ年

五禮 一ツ年 之 高島の城をおひを

川 今はお、斗のつめ 軍ありたきは先

跡 可け之の海く 後 新 年 中 さん する 也と

の 終へは 権系 先 陣 を 望 く の 事 之 以後 は さ

お く の 志 く 再 は な り し け し と つ ふ り

き き り

位 誥

叔井日記云 池上夜 己 等 陣 を 引 衣

や と す る 程 の と 見 之 平 本 右 馬 加 秀 宗 殿

の 陣 之 田 肥 後 守 氏 強 乃 陣 一 子 右 方 金 崎 軍

に 位 誥 の 通 人 之 探 進 し へ は 陣 之 右 位 左 位

の 備 を 扱 す

待 軍

太平記云 足利殿東 左馬頭直義尊氏卿ノ

勢ヲ并テ五万余騎天橋ノ宿ヨリ取テ返

シテ又鎌倉へ發向ス相模次郎時行是ヲ

聞テ源氏ハ若干の大勢ト聞ユレハ待軍

シテ敵ニ氣ヲ吞レテハ不叶先スル時ハ

人ヲ制スルニ利有トテ我身ハ鎌倉ニ在

トカラ名越式部大輔ヲ大將トシテ東海

東山両道ヲ押テ責上ル

本ノ合戦

甲陽軍鑑云國竹近敵鳴方有テ二三千人

敵越トフ之白昼ニ合戦シ多シ也

その他五ノカ勢有テ小方物ハ人ツク

堀山ハ柵トシテ守リテ有テ

方合戦シテ勝テ合戦員を

奪ツケテ了シテ合戦ト申シ也是を以テ

是ト申スルノ事也

の原名戦也 有度ありし 信吉は勝利あり  
敵味方あり 二千三千の統員を法をよき  
世のありし ありしありし ありしありし  
大合戦と申さるる大合戦より かくは  
世間の大河流なるものあり 信吉は勝利  
のありありし 合戦より 康平の政公又子の  
著跡ありしありし ありしありし ありしありし  
ありしありし ありしありし ありしありし ありしありし

セリ合

謙信ありし 解衆あり 謙信自攻 敵を打立  
無防人は敵軍急く 敗軍ありし 日富川の  
城ありし 引籠りし ありしありし ありしありし  
下二千五百名の首帳を以て 其日の午下刻  
に勝時を以て行

小セリ合

新撰信吉記云 其程 引信長は ありしありし

近付け宣ふりたるは<sup>標</sup>其徳玉可切、お強

な、お七り合、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

故、お七り合、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

あり

清正云、兵あり、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

の、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

志<sup>け</sup>あり、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

<sup>下二才</sup>雜兵物語云、昨日、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

セリ合々戦

<sup>十五</sup>甲陽軍禮云、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

セリ合々戦、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

、<sup>難</sup>お強敵也、要害無之

取合

勢州四家記云天正元年癸酉四月廿八日  
濱田家の侍大将丹羽黒田伊達中嶋の四  
大将二万騎を率一阿念河の城近近まで  
阿念河の城に鍋薩摩等不知二男兵  
庫三男弥三郎貞隆は万騎を副城の南一  
三四日程出延野田の細道にて取合  
あり

坪軍

地取合

新田老談記云水田原へハ大勢を催集  
風吹あり之新田是利ハ三万餘騎の力  
勢を可おと事也是は近年の坪軍とは勢  
暗切事ト云合戦ありと諺きこ

会澤除物語云敵片方の軍会号号より子  
子の坪軍に方逢た連とかくる大軍



てか程きましき事やは不<sup>不</sup>逢と皆<sup>皆</sup>巡<sup>巡</sup>眼<sup>眼</sup>多<sup>多</sup>  
抄<sup>抄</sup>成<sup>成</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>  
坪<sup>坪</sup>軍<sup>軍</sup>ト<sup>ト</sup>北<sup>北</sup>取<sup>取</sup>合<sup>合</sup>ノ<sup>ノ</sup>事<sup>事</sup>ナ<sup>ナ</sup>リ<sup>リ</sup>  
奥<sup>奥</sup>河<sup>河</sup>出<sup>出</sup>取<sup>取</sup>ノ<sup>ノ</sup>コ<sup>コ</sup>ト<sup>ト</sup>川<sup>川</sup>ハ<sup>ハ</sup>ナ<sup>ナ</sup>リ<sup>リ</sup>

楯突軍

源<sup>十五</sup>平盛衰記云<sup>小坪合</sup>戦<sup>戦</sup>條<sup>條</sup>小太郎藤平ニ問ケ

ルハ義盛ハ楯突軍ニハ度々逢タレ共馬

ノ上ハイマタシラス如何アルヘキト云

ハ実光今年五十八軍ニ逢事十九度也軍

ハ尤故実ニヨルヘシ馬モ人モ弓手ニ合

事也云々

平場合戦

平<sup>足利殿著</sup>太平記云<sup>藤村候</sup>第一六波羅・譏シケ

ルハ今度諸方ノ敵謀合ヲ大勢ニテ寄ス

ルナレハ平場合戦斗ニテハ叶マシ要害

ヲ構ヘテ時ト馬ノ足ヲ休メ兵ノ機ヲ扶

テ敵近付ハ懸出し、戦ヘシ

又<sup>六</sup>云<sup>山徒寄</sup>山徒ハ皆歩立ノ上ニ重鎧ニ

肩ヲ被推テ次第ニ疲レタル體ニ見ヘケ  
ル武士ハ是ニ利ヲ得テ射手ヲ撰ニテ散  
クニ射ケル大衆是ニ射立ラレテ平場ノ  
合戦叶ハシトヤ思ヒケレ又法勝寺ノ中  
へ引籠ラントシテルヲ云々

平場蕨合

播州佐用軍記云 兩葉秀吉ハ播 信長ハ秀

吉ハ使者を以之申りしは其痛病治せは

姫路へ罷出直りて中合戦夜ハ及直

一或方城を攻め平場の蕨合又は玉境へか

て戦ひ味方城へ引籠り士卒を休めて

攻戦事十夜二十夜も候り云々

野相合戦

新撰信長記云今夜の陣陣尾張方五千人

討たれは津井方三千餘を討てり

と野相の合戦事とは是ハバハ死すま

とよ 夥多諍かと 京中云あへて

野合戦

雑高玄物高後云以るハ今朝野合戦日あつはま

らつ子時計せり名ありて敵ハあつち

らりて遊中たかりて骨折小大て

豆小細色くふいふたゆ後めさけるも接ハ

那い之くふて世屋のの

懸合マ戦

太平記云義助朝臣病死条 土居得能以下ノ者共

同レク死ナハ我國ニテコソ尸ヲ曝サノ

トテ大可嶋ヲ打棄テ伊豫国へ引返ス敗

軍士卒相集テ二千余騎有ケル其中ヨリ

日來手柄露レ名ヲシラレタル兵ヲ三百

余騎勝リ出シテ懸合ノ合戦ニ勝負ヲ決

セント云

釣合ノ合戦

井日記云 攝津青野 氷上殿下知ラシ給

ヒケルハ城主民部ハ名ヲ取タル勇士ニ

テコラヘヌ者ナリ城ヨリ引出シテ討ヘ

シ然ハ大手指手釣合ノ合戦ヲセヨト云

云

打籠ノ軍

源平盛衰記云 平山来城 平山熊谷ニ語り

ケルハ打籠ノ軍ハ甲臆カ見ヘス如何ニ 二三餘許カ

ニモ追手ニテ鍔金頭サント思ツテ子ノ

時ニ山ノ手ヲ忍出タリツレハ寅ノ時ニ

ハハコヒヘ来リ付クヘカリツルヲ云々

マハラカケ軍

大友貞隆記云 高津島久公人勲を記す 掃部

助宗天ノ中付ラ此ナリ 評定乃子細モクニ

評定宗天ノ臨用ノ覚悟ノ如ク 孫 中宗ヲ

ト古北家老を以テ臨用スルニ

のふんへ川新之巻、死人事のしおしん  
軍の勝るも、もたはるも、新軍儀不  
らは、ぬれ、海へ軍流のさ、まはま、は  
ぶ、り、の、軍、の、利、を、う、な、る、人、に  
あ、ん、の、ら、ち、な、り、と、の、さ、ま、あ

牛角ノ合戦

叔井日記云 丹波口五ヶ 播磨の別所屋子  
合戦 之信忠陣を討建之合戦一、証述い

へとも、味方あり、討死、多、く、信忠、の、居、陣  
を、棄、る、す、ま、に、に、さ、ん、ぬ、ず、い、し、も、信、忠、の、衆  
を、討、死、の、功、あり、ぬ、し、も、お、あ、り、牛、角、の  
合、戦、と、云、ふ、の、ま、に、は

主戦

増補赤忠日記云 天正三年五月廿一日武田、  
陣、を、付、候、と、し、く、軍、士、五、騎、馳、来、り、ち、神、君  
の、内、を、害、す、た、ま、り、討、死、す、を、以、り、討、死、す、る、者、

手遣

〜不中難免と故弓勢三徳と〜北へ去る  
大久保治右衛門尉志佐其元七郎右衛門尉志  
世に謂て云く今口の軍尾州の多の援多ありと  
召の兵は主戦と〜尾州の勢も先んをせ  
ら連は當之の恥辱ありと譏ノ方神良賢  
慮を伺ふ方神良是を許し〜終ふ

方右 奥摩記云 方い子 築紫龍造寺政宗子

橋杉野井安河院寺理宗像原田長野小  
代地坂五三十四人の五人并子高平戸ま之味  
子まひりまつ〜つと〜く降りあり

又云 地坂五三十四伊ままときま〜ま〜は方右

宗麟云の幕下北臣と〜人りすうまじ之忠

善き事夜くまうまの〜同也軍の世に  
少系禮えく〜た〜へまをい〜あま禮えり道ん

政宗〜可連誅討を〜ま〜は伊豫守り忠

天正十一年

奥羽永受軍記云 南部領境谷原也 江刺長作

花人の浪遊をす之方 <sup>下</sup> 驚き人殺を具し安

懐の楯子打却境を敵に破りま之と可いみ

をうへし知をいしそりうり

宗政右記云常滑きてと急き信りや

てあ那照物 <sup>五</sup> 信り元年とあるのは

連家のゆへしありしをいあるなりと大

聖の宮田さあ〜〜 乃 <sup>と</sup> 繁弱の処より

里尾河へ <sup>と</sup> あ〜〜 一人信りま〜

世念の <sup>し</sup> 可きし 其事也 幸々急き侍連は

ま <sup>し</sup> 何 <sup>と</sup> 保 <sup>す</sup> 事 <sup>の</sup> 次 <sup>り</sup> たり <sup>と</sup> 中 <sup>へ</sup> あ <sup>る</sup> 也

里

手働

叔井日記云 毛利家と丹羽家別所也 丹波

家は礼儀は宗徳乃唐之風 大平 <sup>と</sup> なる <sup>也</sup>

いとは 河津 新 略 在 以 之 村 中 へ 出 事

如 思 識 の 事 以 以 修

手合 手ツカヒ

手合ノ軍

太平記云 山名右衛門 佐為敵條 佐々木勢餘リニ手痛

シ懸ラレテ叶ハレトヤ思ヒケン 神樂

岡へ引上ケル 宮方手合ノ軍ニ打勝テ氣

ヲ揚ケ勇ニ策テ云々

又云 足利殿打越 大江山条 備前国住人中吉十郎ト

攝津国住人ニ奴可四郎トハ兩陣ノ手合

ニ依テ搦手ノ勢ノ中ニ在ケルカ中吉十

郎大江山ノ麓ニテ道ヨリ上手ニ馬ヲ打

拳テ奴可四郎ヲ呼ノケテ云ケルハ云云

黒身旧跡 大光寺 為信云大光寺を以て

可成事と云云 大光寺 大光寺を以て

大光寺と云云 大光寺を以て



市海

室町殿御諒云 侍中ノ内子ノ孫御をとり人  
築前守ノ子ノ孫御をとり人ノ孫御をとり人  
状の意は有増成ありと云い六月二日北未明  
ニ信長の子孫御を御守りおのゝ一討り打果し中  
に中 幕近の息表へ諒書を率一とせりて人共  
許高川と一月の梓たてし討り中のか人の共  
秀吉ノ為と云いせ中一乃安の百其許おとせり

まおの味子合ありておとせり

播州佐田軍記云 十二月十四日合戦条 城を引去れは山

編勢あり新芝居一息を正徳居より去は  
今日言山福富より合の軍に利を失軍云  
能多討建見方小疵を負ふより今北葛引受  
より一取き戦ふ者お古相群なり一事と  
也

賀越関神記云

新倉之原 御城屋条

大將孫小堂寺正外

大坊主一撥引率一之と庫師の城へ押寄  
中 三千餘騎の合楯を叩之時関本々々を領事三  
ヶ夜也水邊付之とんとする夜日城中の東西の  
木戸口に大旗を打之時関カ元々々の勢をそなせたる  
るの外より引へる多き方勢すく合庫師  
程の志の籠りたる人する城の山勢高きハヒ  
之守居しよりいよもとし必川より集たる  
も守未多しありたるを悔之知るの軍一撥

すもや方水巻之日時山勢高きとて大覺寺下  
知し市きは該勢つ一方しをまゝ之谷し峰  
ととりて養とりり

ハコニオ天正記云 居陣の織田と張以信長を  
道立むこまに山有 合とては水勢も高  
飛ぶ川乃ち河を越き那戸一海東此坊か  
まへ引むりて水邊をまへて陣連云々

東近基業云 信長公は丸根の役法を打お給ふ

しり途中より丸根の居城を討つ之を不敵と我  
討時の巨博は古学を討せし惜しと之を討つを  
會人之引返さるるを以て其の軍はつゝ其の城  
亡と云ふ極危乃死一生乃初立と之を打ぬ人  
とせらるるに其に柴田權兵衛と云ふ其の坂  
井右衛門池田勝三郎等討つ今川四萬餘の  
人殺す之を會合也。軍打勝つ其勢威は海所  
一瞬方僅に三ヶ所餘の會するに近川之戦をす

し何程の事かをい仁術有る處其の勢の強さ  
は古敵の擡たる事より一里唯新軍と云ふ其  
一結集之戦つた也と云ふ。其時云ふ  
叔井日記云天正五年の冬龜山の城合戦之  
事信長曰く國賊之を討つも其を不意に信  
長勢を挫き棄せしむ其時丹後宮・合戦  
と信長馬山に合戦し信長擡陣の内より其  
の合戦は巨細ハ事長人候

家忠の陣抄云天正七年九月十三日伊豆郡  
赤坂十七日赤坂合戦赤坂御下中、由濱松へ中來

手組軍

七つ赤平家物語云伊東乃郡 討兵集 大將軍 権高  
三位中将宣旨七布多はいつなれば毎夜軍  
買くるては方は去勢なり加記 加記は去勢也  
赤坂の軍の買くるては赤坂 赤坂は去勢也

月一日物りもむいへく 軍を去此ハ二を海く  
赤坂 赤坂を抜口のいんさるよせよとて引退く本  
着はあき哉又之すは平家方おつ了そ一騎  
もしらさあ討とれやもあおとてくおひあの  
よこそ 討とてす

手攻軍

太平記云 大渡山崎 此軍散レテ 後橋ノ上  
ナル 櫓ヨリ 武者一人 矢間ノ板ヲ 推開テ

此橋ハカイ楯櫓ノ料ニ所々板ヲ弛テ候  
へ共人ノ渡リ得ヌ程ノ事ハ有マシキニ  
テ候坂東ヨリ上テ京ヲ責ラレンニ川ヲ  
阻タル合戦ノ有ランスルトハ思ヒ設ケ  
ラレテコソ候ツラノ船モ残モ事ノ煩計  
ニテヨモ叶ヒ候ハシ只橋ノ上ヲ渡テ手  
攻ノ軍ニ我等カ手ナシノ程ヲ御覽シ候  
へト敵ヲ欺キ恥シメテ突テソ立タリケ

ル

<sup>六十一</sup>奥田永業軍記云 山内白旗 佐竹の一旗山内

大山石塚戸お千條孫其外 中岩城弓人 其

有人部合者方集騎方之里余ノ下除名希り

其除名ノ三月廿三日と討陣

一帯ノ事此軍を始有戦ノ事夥

一帯ノ事此軍を始有戦ノ事夥

息を止候可うん なるる 南方に先陣を勢討

連之引退く

手定ノ合戦

太平記云 山門 吉良石堂仁木細川ノ人々

是ヲ聞テ昨日ハ已ニ追手ノ勸メニ依テ

高家ノ一族共手定ノ合戦ヲ致シツ今日

ハ又搦手ヨリ此陣ノ合戦ヲス、ノラレ

ル事誠ニ理ニ當レリ云々

手攻勝負 手詰勝負

太平記云 三浦大多和 五月十六日ノ寅刻

ニ三浦四百余騎カ真先ニ進ンテ分陪河

原へ押寄ル敵ノ陣近ク成マテ態ト旗ノ

手ヲモ不下時 聞カス 声ヲモ不奉ケリ是ハ敵

ヲ出シ抜テ手詰ノ勝負ヲ決スタノ也

鞍井リ此云 丹波家之木列 山崎辰也危角和談

の上ニ何卒秀吉をたばかり壁中より

話の傍よりと云われ

又云丹波勢 時刻の位を足合せ一書に信長

の要害へ甘んじしと云ふ語に、折平殿を討て明智

勝川等の宗坊の者としの生首を一つ燃

切之槍へ

足輕場

東遷基業云々久保益昭立し之初夜のみ合

を大事にすは理り、折平の志田りゆ合の

謀略を語り、徳川之今も小橋よりゆゑに敵

を討てしは子安も、初はも勢斗を率へて

初に語り、徳川リ押續けしは、重原牙、満之

故の遠月を伺ふ、安もあ房子父子三人一

不に且懐き、打ち下知す、を居之世又多

居平父殿、軍使を馳之、志田父も善人、足輕場

と出之、強引し、色岡父の者も之を喰付て

永放さず、折平の幸也、折平と我協へ場と

人敵を蒙られ、折平、某き云、一戦し

吉田を討捕へ——と申す事北は西角  
乃迄参りし可及此使の往來する時福しを新

足輕軍

足輕合戦

勝軍北は軍記云

細川氏綱  
遠城入常

河内中是新は角

河内へお入る屋の陣を善處へ安んずる作對

治あると由お識し之六月五日搦所は引

退しと川くくると好く是搦所を午辰水備

河内西へ参入十七ヶ所陣を永市社は安

権社

見美作野尻丹波有部肥後守子息高藤みかじ

りく打之出ひこの是煙軍止とまじり

新搦信長記云細川山崎をとおつ力こくと

人数を立てて居たりとて是後互に對陣し

て十騎二千騎つて出之是煙軍也

又云双方は煙合戦と云ふ一日戦終りお引

又云引と云ふ事



江隈記云梅家乃小川を志しと城之は  
会寺<sup>村</sup>を移す稲葉山より以てを記す  
小卒余り無事一付入らせらるるは無事なり  
と梅相理知る事り能知し梅へ記す之れ子  
和井準人佐は稲葉山の梅と云ふ力と  
人数を立止て居りて其後互に對陣  
二十騎二十騎つと出之は煙軍計り也  
同日福高合戦記云  
信長聞  
降第 同十六日江州

比敵過公多る陣あり之等佐山五部を志し  
左弟あり一は同日十日坂本より十所  
斗りけり是煙軍志あり

西國は魯向記云押寄能城高の及是煙師以  
口以吐寄打破外城威魯弱誣強之攻

天正記云<sup>秀吉</sup> 秀次を大將とて陣治賢

又子仙名権之弟相紫左衛門尉七右川友五郎曰  
梅相理是智浅理ゆき弟前理勝右衛門守山也

一柳市河内田三市也即字ハキハ城ヲ押去  
セ高ハ三将軍ハ乃子

且輕迫合

房総治外乱記云天正十六年九月下旬柘木  
大膳房州勢敵百を率一上総の万方森の城を臺  
城堅く守り之處す柘木相ハカツテ城の  
乾の方ハ晴山ハ勢をかまへ之戰陣す且百  
小川ニツを隔之程引ニ所斗なれば互の衆

計ハ之或三將軍ハ合或方森よりハ情を攻め  
又は方森城を圍之方森を攻ち互の方便を以  
て之攻つ者ら進川ハ之市進ハ城津のハ  
不臨

謙信家記云輝信ハ輝信勢上下ハ子  
をハハ之備之敵味方の旨やハ危人  
ナ七ハ所程ハ互の軍を備立之  
申林道是煙セリ奈々之居ハ々々

三好記云月八月十一日に比叺城の庭中ふれ  
之宗三方の有るるを追おす共うありし  
色色つくりれ者長宗の身十何民部大捕三好  
か加此外人数十七ヶ所入ら運こころと好考  
つるま政務者板並の城城つたりと信長人の庭  
とゆし号煙せり合止ら隙あり宗三ハ素一和  
一高田舎一味也

下、四才  
雑多物語云今時の通り合ふありたの万一

出陣と侮れ玉置持りあつと号煙迫りきひ  
しくあつと政の侮れありきと云ふは  
此成之

言葉戦

大友奥庵記云文 幸ふ心丑長陣の万り  
難難のや川をく敵小味方小云業戦ひふあ  
る時ハ愚口しきと云ふ時を難講物云にハ  
ひあし之奥をさしあす時ハあり

最後合戦

官地論云政親宣最後合戦可為明日去来  
名残惜欲酒盛被仰從先衆至若衆近參御  
前大瓶共立並無上下推並被遊政親女中  
常雖累人目限今遊宴宴從簾中立出給御齡  
未壯吐抑不ノリ五衣被召紅袴其外近習外様女  
房達皆御吐舖被茶

此遷基業云信長了臨之面ハ中ハ交ハ

其理ありはあはれ然る悉く場ハ法城ハ日ハ吾  
照ハ始ハのハ考ハをハ心ハ通ハ立ハ之ハ計ハ果ハ也ハ  
敵方勢ありははれはれと恐れ之出合すは  
信長弓矢永之末代ハ初集あり石段討死  
を了る者ありはれを並へて家名を重んせこそ  
在ハ之ハありハ計ハ策ハ一ハ之ハ計ハ策ハ  
の稱置り言ひ者なり此等ハは熱心ハ旗原  
つるを控へて今度ハ最後ハ合戦ト云われ

はあ社へ参詣し家にお母を祈り具に最後  
に破乞<sup>たむ</sup>中<sup>たむ</sup>屋<sup>たむ</sup>とく之馬より下立神前  
をおく山殿の傍原を歩力に但を奪りて路  
を地りつけ祈念ある云し  
天正記云これ<sup>これ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup> 敵の人数ある討軍  
を<sup>この</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>会<sup>会</sup>戦<sup>戦</sup>より<sup>より</sup>お<sup>お</sup>軍<sup>軍</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>徳<sup>徳</sup>中<sup>中</sup>へ<sup>へ</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>  
少敵の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>方<sup>方</sup>予<sup>予</sup>中<sup>中</sup>を<sup>を</sup>け<sup>け</sup>信<sup>信</sup>忠<sup>忠</sup>哉<sup>哉</sup>中<sup>中</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>  
変り<sup>の</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>一<sup>一</sup>書<sup>書</sup>し<sup>し</sup>は<sup>は</sup>後<sup>後</sup>十<sup>十</sup>字<sup>字</sup>を<sup>を</sup>切<sup>切</sup>り<sup>り</sup>お

吊合戦

新田中良家清記云那波殿善代の侍とて  
守の切子方主れありては生い月大將となり  
し方より<sup>乱</sup>外<sup>外</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>を<sup>を</sup>集<sup>集</sup>  
め一<sup>一</sup>本<sup>本</sup>の<sup>の</sup>内<sup>内</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>知<sup>知</sup>を<sup>を</sup>本<sup>本</sup>と<sup>と</sup>吊<sup>吊</sup>ひ<sup>ひ</sup>合<sup>合</sup>戦<sup>戦</sup>は<sup>は</sup>此<sup>此</sup>  
ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>成<sup>成</sup>勢<sup>勢</sup>を<sup>を</sup>甲<sup>甲</sup>車<sup>車</sup>に<sup>に</sup>出<sup>出</sup>て<sup>て</sup>了<sup>了</sup>て<sup>て</sup>成<sup>成</sup>勢<sup>勢</sup>に<sup>に</sup>出<sup>出</sup>て<sup>て</sup>了<sup>了</sup>  
那波<sup>那</sup>波<sup>波</sup>合<sup>合</sup>戦<sup>戦</sup>云<sup>云</sup>は<sup>は</sup>此<sup>此</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>  
甲<sup>九</sup>陽<sup>陽</sup>軍<sup>軍</sup>禮<sup>禮</sup>云<sup>云</sup>は<sup>は</sup>真<sup>真</sup>正<sup>正</sup>の<sup>の</sup>時<sup>時</sup>又<sup>又</sup>義<sup>義</sup>元<sup>元</sup>を<sup>を</sup>護<sup>護</sup>り<sup>り</sup>の

孫正子信長が教を以てしむるに年より當年  
其方より氏志を以てしむるに又の吊者戦  
する心操るるに

謙信家此云 信州海軍 平合戦 景春 誠徳を以て

て本犯へ罪業の要を以てせしめしむるに

工藤が對面を以て宣ひけるは我父父を為す

能登加賀とて西を以て戦向信長に

利を得るも云我の如少くは父父を以て

存に近きなり此は新法に能く存するに

務合戦と云て天運つぎに油断に討たるる

隠さるるに百つ別も早くおとへ御父の吊合

戦は初迄く、永續する方の此目も掛り先祖の名

字を以てす人中度耳喜吾消治父子戦中の

向に仁存分仁に

二十五才 天正記云 秀吉上洛 山 御田三士の

之々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

加さるゝものなり。秀吉、弟、合戦、念の、左、刃、戦  
う、これ、御、子、を、海、に、志、ゆ、人、を、も、あ、さ、さ、り、と、ま、り  
い、さ、さ、り、

見、守、難、保、立、守、備、所、は、神、前、王、七、信、孝  
西、田、子、郎、左、衛、門、長、春、立、守、備、所、に、田、代、伊、守  
為、子、孫、少、郎、傳、者、を、ま、り、中、五、嘉、隆、を、<sup>明</sup>、<sup>久</sup>  
<sup>ク</sup>、<sup>崎</sup>、<sup>ま、る、と、是、<sup>看</sup></sup>、<sup>一</sup>、<sup>拜</sup>、<sup>受、を、右</sup>、<sup>射、は、永、立、水</sup>  
我、石、思、代、為、一、分、の、弟、存、戦、を、遂、け、君、之、討、死

を、得、殉、死、と、可、存、給、は、<sup>一</sup>、<sup>五、の、言、理、由、一</sup>、<sup>引、込、市</sup>  
い、一、子、と、<sup>一</sup>、<sup>一、言、之、形、切、と、一</sup>、<sup>一、言、之、旨、別、に、送、り、也</sup>  
の、皇、御、孫、と、い、は、れ、傍、守、中、<sup>一</sup>、<sup>一、中、中、請、ひ、右、必</sup>  
必、傍、守、中、人、と、い、は、れ、<sup>一</sup>、<sup>一、中、中、請、ひ、右、必</sup>、<sup>一</sup>、<sup>一、中、中、請、ひ、右、必</sup>  
立、賞、賜、<sup>一</sup>、<sup>一、為、は、所、乞、如、此、と、一</sup>、<sup>一、一、依、之、者、大</sup>  
子、研、を、賦、<sup>一</sup>、<sup>一、短、意、の、所、お、り、引、き、一</sup>、<sup>一、今、日、迄</sup>  
も、如、<sup>一</sup>、<sup>一、一、八、五、云、甲、斐、と、一</sup>、<sup>一、思、云、し</sup>

増補、簡、并、家、記、云、老、臣、松、倉、右、近、進、出、之、曰、此

御書所記秘志の光秀の事之豈只智を為り  
まんや然れ去年東光秀との好く又然此の  
一軍小一の計智立光光秀へ同心の志を返返  
答し其軍を率し之城河の鴨山出する可也  
被地究竟の要害なれを暫く立陣し其の  
海を可也見合然れ其御業秀吉を以て信長  
恩顧の流羽等馳登らは吊合戦ありし其時  
由通し之運送切ある及しと強之謀なり

清正記皇山同記云号惟君り傳へし一あり入るを碑  
記一書あり其末又諺をいらししによる之城内  
ありし清正記と流平左衛門立布衣ありし其  
開きりありある伝る号惟君り軍小わ川とて  
ら連之方り十九人討永くしけに吊合戦し之  
左京方ま蔚山一軍をとり入らる  
九九才  
勇お永家軍記云二布松河宗武家の志は  
敵を討小志くはしり急る二布松の押業



せ又の吊合戦せんといへば、  
連幕下一糸郎等我者らと  
志しり希る

武者お語云越後五長尾為宗のはる身  
六甲との猪松殿と申して二人  
に六甲殿といひし物や、  
猪松とのは跡の如く、  
宗の猪松をばは悟し、

と、  
かく越中の敵とわかれ、  
とり別六郎殿は忠告あり、  
よまゝせは父為宗を、  
越後へ押入らんとす、  
いふに、  
うゝゝ、  
山田を傳へ、

諸勢を催し、おく越中の敵を志こゝろひ本  
皇をとけりし、おのちささきしりり

松原自休手録云、諸卒、品器一、終り、なほ職田  
降、忠、得、折、を、あ、つ、就、来、清、康、の、は、為、し、は、吊、合、  
戦、也、美、石、の、は、為、の、い、層、忠、戦、を、討、死、す、へ、と  
云、者、森、山、を、引、お、んと、發、立

東、近、基、業、云、神、君、大、高、の、城、より、歸、ら、せ、終、り、  
後、氏、美、の、使、者、を、以、て、孫、元、の、吊、合、戦、を、思、見、

立、り、連、り、し、時、に、早、人、の、お、り、之、を、老、ら、し、志  
を、は、元、康、と、信、長、の、向、ひ、さ、さ、き、此、一、面、を  
討、取、り、之、孫、元、の、思、を、獲、り、可、中、の、と、度  
後、催、但、き、せ、終、り

悔  
合戦

教、井、日、記、云、宗、言、云、此、討、死、あ、そ、り、と、れ、い、  
と、し、傍、者、を、よ、し、之、吊、り、死、申、方、之、悔、  
合、戦、を、一、つ、す、る、さ、知、し、な、く、別、不、後、を、し、漸

加力中よりり<sup>大</sup>あまは<sup>大</sup>別所<sup>大</sup>の<sup>大</sup>切<sup>大</sup>の中<sup>大</sup>ゆ<sup>大</sup>り<sup>大</sup>  
云方げり<sup>大</sup>の<sup>大</sup>数を<sup>大</sup>出<sup>大</sup>し<sup>大</sup>中<sup>大</sup>と<sup>大</sup>れ<sup>大</sup>に<sup>大</sup>

合戦

建内記云正長二年七月三日与奥福寺别

當僧正

一、兼院僧正照月也

以執事兼曉僧都奉春被

・豊田中務

坊大兼院門下也

与井戸有合戦之企云

云可有炳誠之御下知哉之由也相尋子細  
之處頓称坊去頃被殺害了是井戸之所行

也云、頓称坊自平生讓子中坊了依之中

坊為散擗<sup>陶</sup>憤押寄井戸許可致合戦云々是

雜掌杜田法師所申也

又云永享三年三月十二日丙子早且参室

町殿申入多武峯子小川合戦事大和國四

郷斐小川弘武<sup>國民</sup>知行之所自多武峯動

致押領結句去六日卒大軍寄来小川之在

所<sup>宇多郡</sup>及合戦凡當國合戦依御制止属

静謐之所違背上意候条不可然云々

武家名目抄稿第十二册

明治十五年十二月 日旧稿校正 小野由久

日年月月七日再校并書 青山景通

日月十六日曉以旧校遂一校了 職

明治十七年二月十六日 校合 青島英保





圖書大庫

口頁十本

口頁十本

口頁十本

